

① これまでの梅雨の状況について

■梅雨明けが遅れている

梅雨入りは平年より3日早い～6日遅かった。8月1日現在、沖縄地方から北陸地方まで梅雨明けしたが、沖縄と奄美地方で平年より3～8日早かったほかは、平年と比べて8～13日遅くなっている。

表1. 梅雨入り梅雨明けの時期（8月1日現在）

地方	梅雨入り			梅雨明け		
	今年(2006年)	平年差	平年	今年(2006年)	平年差	平年
沖縄	5月14日ごろ	6日遅い	5月8日ごろ	6月20日ごろ	3日早い	6月23日ごろ
奄美	5月13日ごろ	3日遅い	5月10日ごろ	6月20日ごろ	8日早い	6月28日ごろ
九州南部	5月26日ごろ	3日早い	5月29日ごろ	7月26日ごろ	13日遅い	7月13日ごろ
九州北部	6月8日ごろ	3日遅い	6月5日ごろ	7月26日ごろ	8日遅い	7月18日ごろ
四国	6月8日ごろ	4日遅い	6月4日ごろ	7月26日ごろ	9日遅い	7月17日ごろ
中国	6月8日ごろ	2日遅い	6月6日ごろ	7月30日ごろ	10日遅い	7月20日ごろ
近畿	6月8日ごろ	2日遅い	6月6日ごろ	7月30日ごろ	11日遅い	7月19日ごろ
東海	6月8日ごろ	同じ	6月8日ごろ	7月30日ごろ	10日遅い	7月20日ごろ
関東甲信	6月9日ごろ	1日遅い	6月8日ごろ	7月30日ごろ	10日遅い	7月20日ごろ
北陸	6月15日ごろ	5日遅い	6月10日ごろ	7月30日ごろ	8日遅い	7月22日ごろ
東北南部	6月9日ごろ	1日早い	6月10日ごろ	-----	-----	7月23日ごろ
東北北部	6月15日ごろ	3日遅い	6月12日ごろ	-----	-----	7月27日ごろ

■梅雨期間の降水量が多い

梅雨期間の降水量は、北海道や東北地方北部を除いて平年を上回った。東北地方南部、関東、北陸、山陰、九州、南西諸島および長野県などでは、平年の1.5倍以上となるなど、かなり多いところがあった。なお、梅雨期間の降水量は、南西諸島では梅雨期間にほぼ相当する5～6月の合計降水量、東北地方から西日本は6～7月の合計降水量を使い、同じ期間の平年値と比較した。

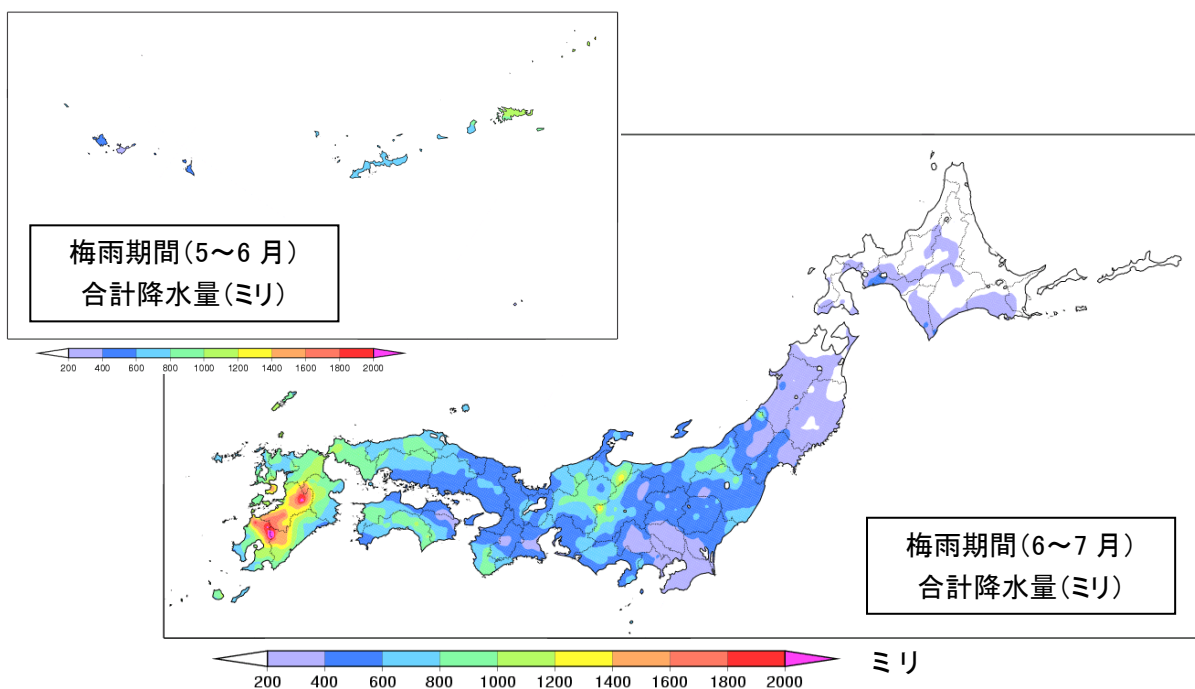


図1. 梅雨期間の合計降水量（ミリ）

（南西諸島は5～6月、東北地方から西日本は6～7月の合計降水量を用いた）

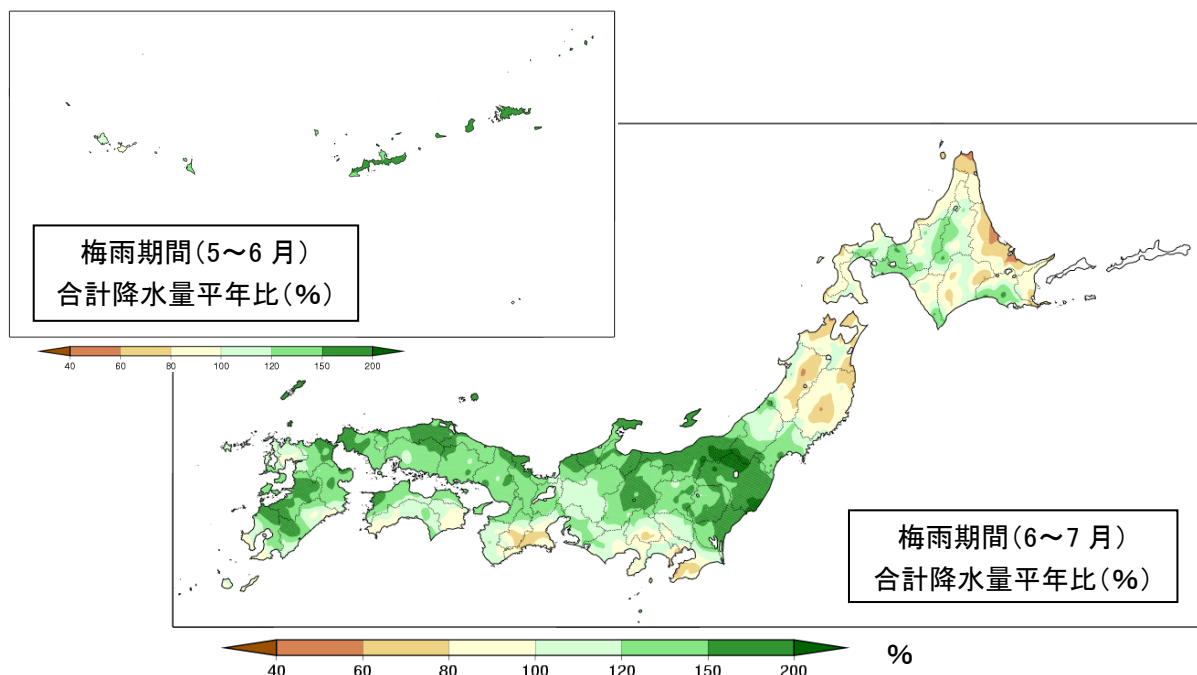


図2. 梅雨期間の合計降水量の平年比(%)
(南西諸島は5~6月、東北地方から西日本は6~7月の合計降水量を用いた)

■短時間強雨が頻発した

5~7月の期間中、九州地方を中心に1時間50ミリ以上の非常に激しい雨を171回観測した(全国アメダス約1,300地点におけるのべ回数、100地点あたりに換算すると12.5回)。これはアメダスの統計を始めた1976年以降、最も多い回数となり、今年の梅雨期間に短時間強雨の発生が特に多かったことを裏付けるものである。

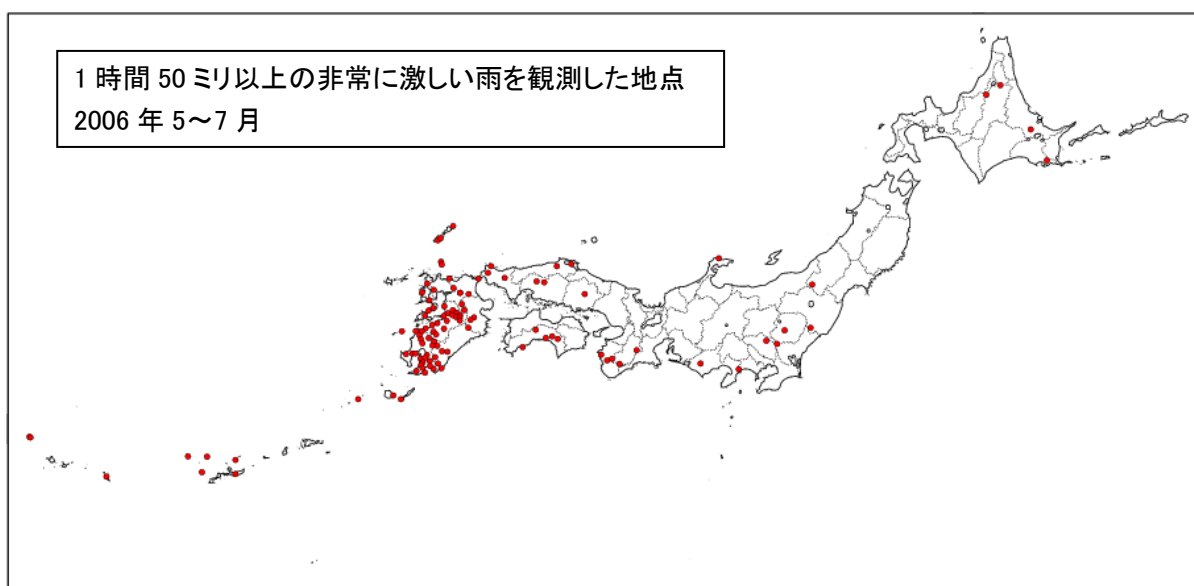


図3. 1時間50ミリ以上の非常に激しい雨を観測した地点(5~7月の期間中)

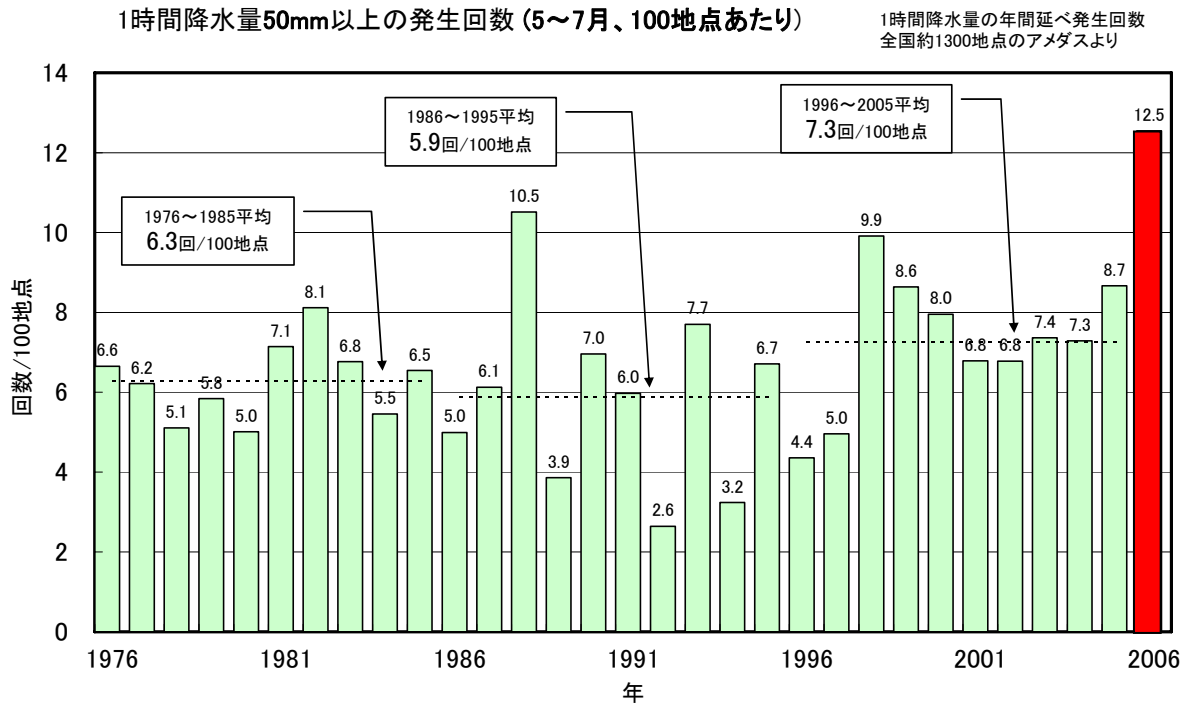


図4. 1時間50ミリ以上の非常に激しい雨の発生数(年ごと、5~7月の期間中)

■ 同じ場所で数日間強い雨が続いた

同じ場所で長時間、強い雨が降り続いた。このことから、九州や長野県、島根県を中心に 29 地点で 24 時間降水量の観測史上 1 位の値が更新し、また 82 地点で 72 時間降水量の 1 位の値が更新した(いずれも全国のアメダス約 1,300 地点中)。

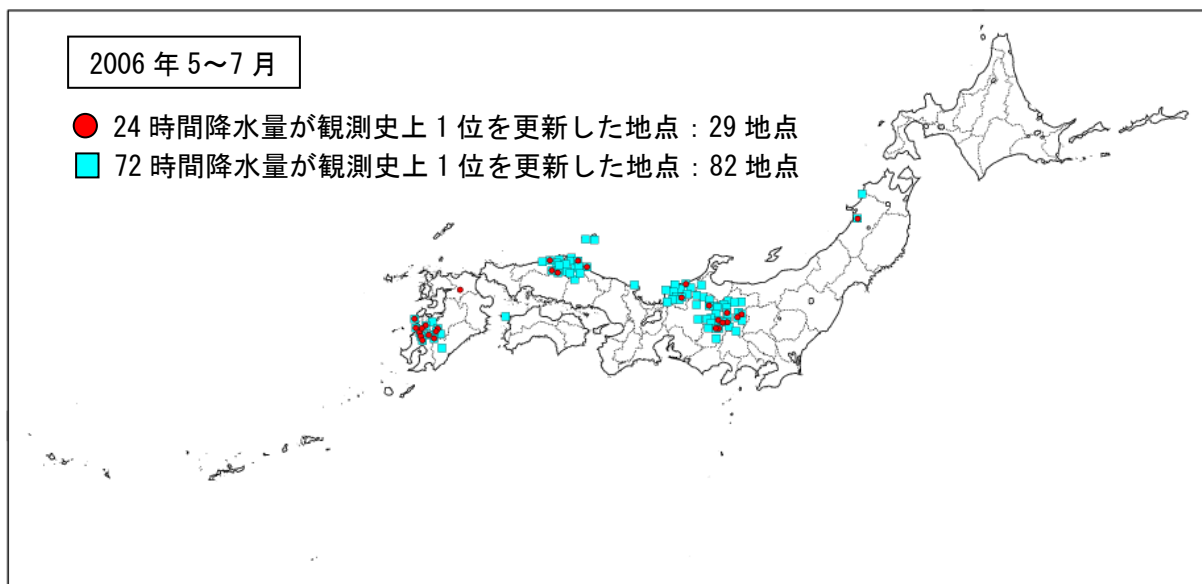


図5. 24時間降水量、72時間降水量が観測史上1位の値を更新した地点(5~7月の期間中)

■平成18年7月豪雨

7月15日から24日にかけて、九州から本州付近にのびた梅雨前線の活動が活発となった。

このため、長野県、富山県では7月15日から24日までの総降水量が多い所で600ミリを超え、長野県玉滝村御嶽山(オンタケサン)で817ミリ、富山県立山町で816ミリとなった。また、九州では、同じく15日から24日までの総降水量が多い所で1,200ミリを超え、宮崎県えびの市で1,281ミリ、鹿児島県さつま町紫尾山(シビスアン)で1,264ミリとなった。九州、山陰、近畿、北陸地方、および長野県では、この期間の総降水量が7月の月間平均降水量の2倍を超えるなど記録的な大雨となった。

24時間降水量は、19日10時頃までに長野県塩尻市木曾平沢で255ミリ、23日7時頃までに鹿児島県阿久根市で622ミリなど、これまでの最大記録を更新したところがあった。

この大雨により、長野県、鹿児島県を中心に九州、山陰、近畿、および北陸地方などで土砂災害や洪水、浸水害が発生し、死者が長野県で11名、鹿児島県で5名など26名となった(7月31日現在、消防庁まとめ)。気象庁は平成18年7月15日から24日に発生した豪雨について、「平成18年7月豪雨」と命名した。

なお、この豪雨の要因については、平成18年7月25日発表のトピックス「平成18年7月15日以降の大雨に関連する大気の流れについて」を参照されたい。

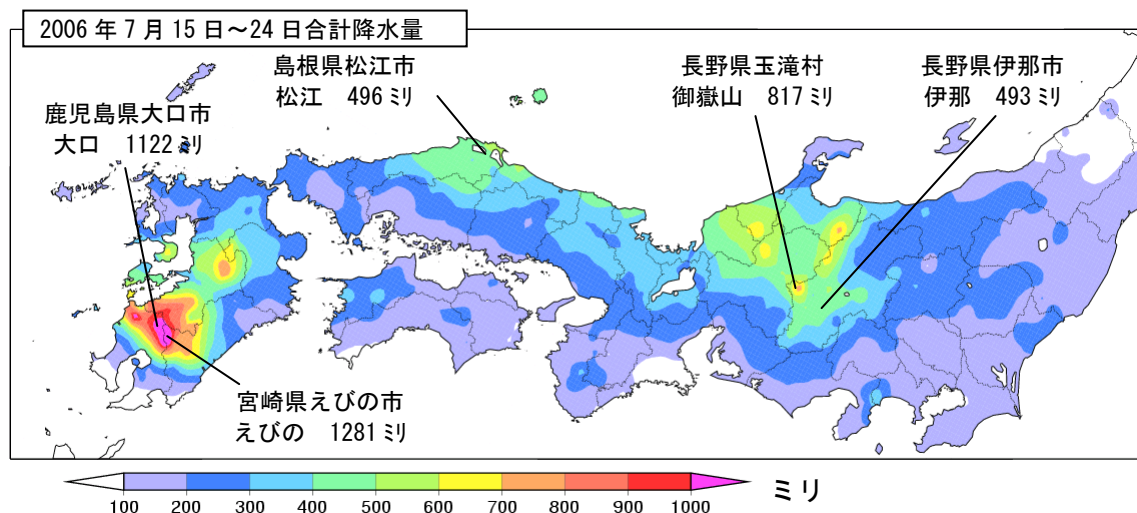


図6. 7月15日~24日までの合計降水量(ミリ)

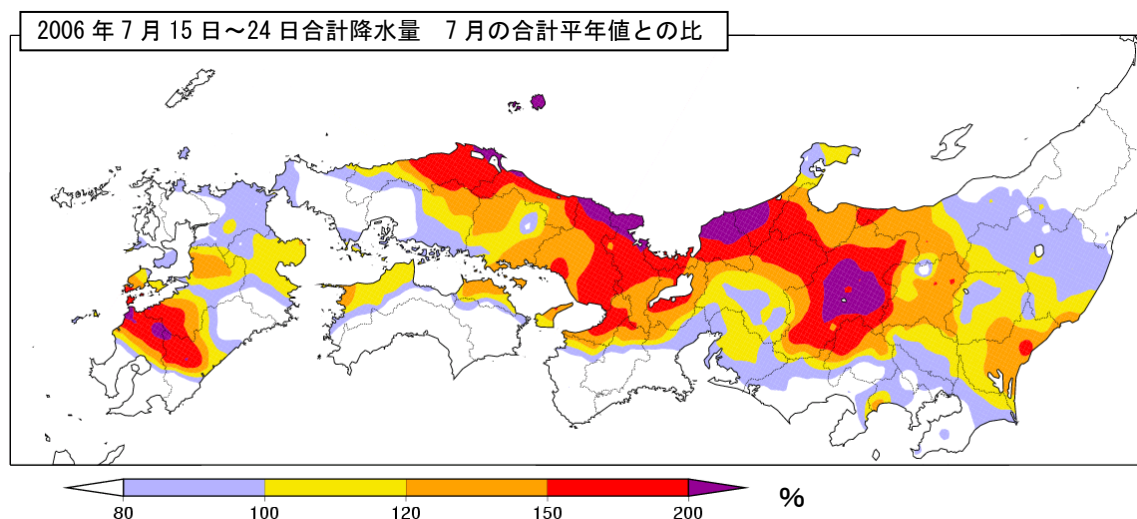


図7. 7月15日~24日までの合計降水量 7月合計平年値との比(%)

② 日照不足(4~7月)の状況について

■ 6月(東・西日本)を除き4、5、7月と日照の少ない状況が続いた

4~7月にかけての日照時間は、6月が東・西日本で平年並だったのを除き全般に少なく、4、5、7月はかなり少なかった。このため、4~7月の4か月間合計は全国的に平年を下回っており、東北地方から西日本にかけての広い範囲で平年の80%未満となり、東京など平年の70%未満となったところもある。

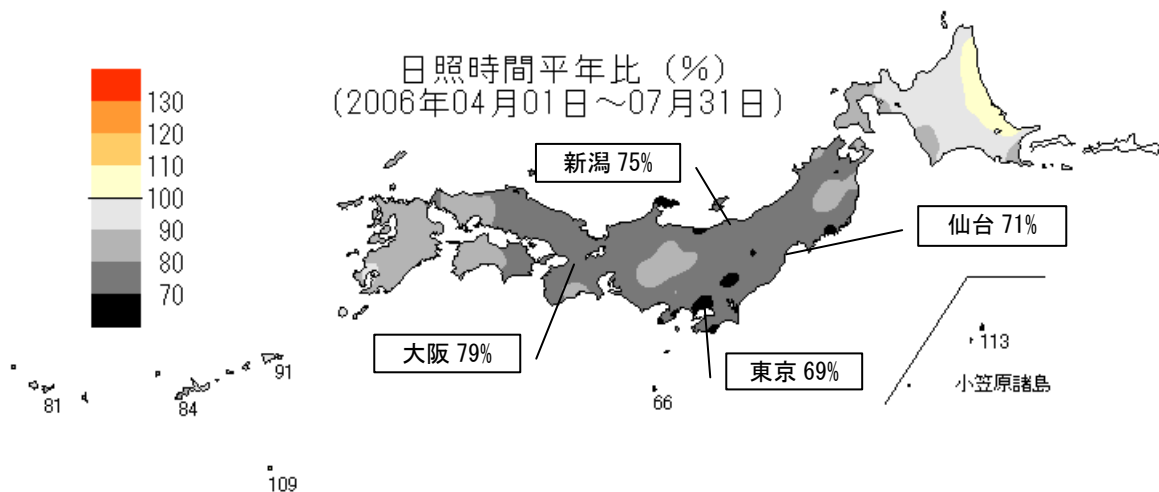


図 9. 4~7月の日照時間平年比(%)

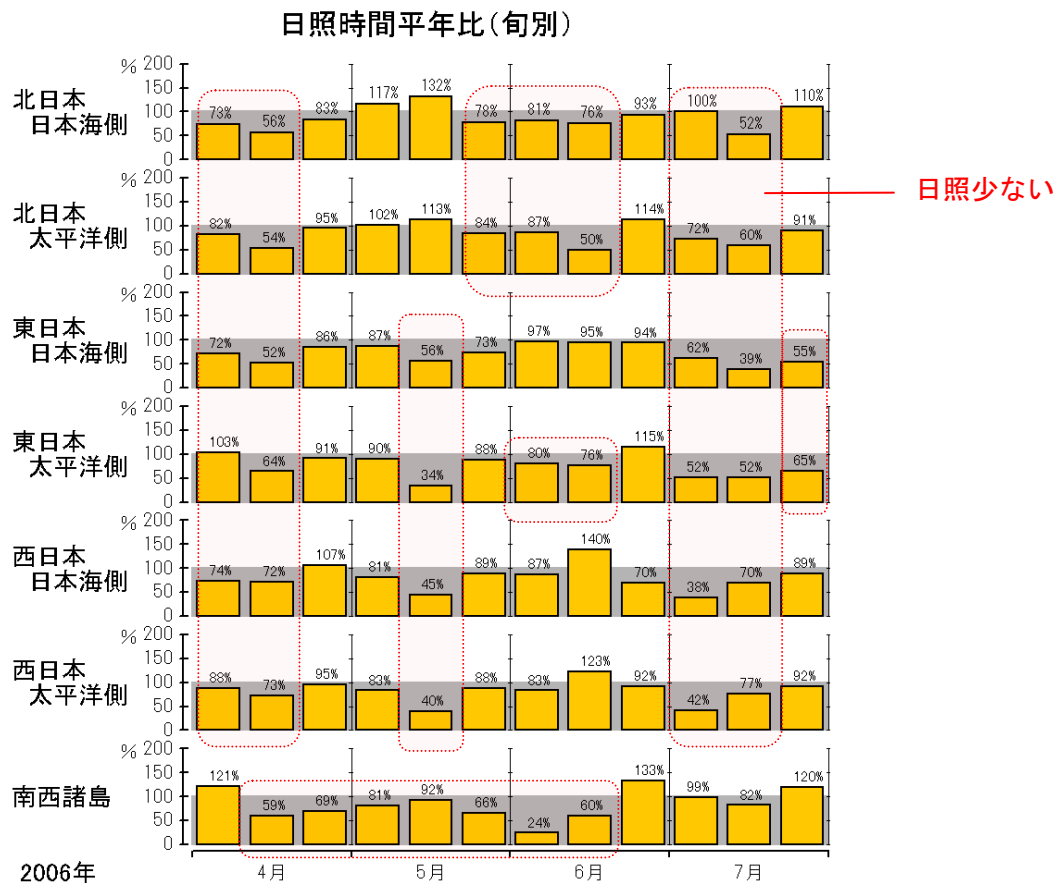


図 10. 日照時間平年比の経過(旬ごと) 赤点線で囲んだ部分で日照が少なかった

■日照が少ない状況が続いた原因

長期にわたる日照不足をもたらした要因は時期によって異なっているが、共通する特徴として、

- ・日本の南海上で亜熱帯高気圧が平年より強く、本州付近が前線帯となりやすかったこと
- ・日本付近で偏西風が蛇行しやすい大気の流れであったこと

が挙げられる。

それぞれの期間について、日照が少ない状況をもたらした日本付近の特徴的な大気の流れについて以下にまとめた。

4月上旬～4月下旬前半：動きの遅い寒冷低気圧が日本海をたびたび通過

4月上旬は、上空の大気の流れが速く、短い周期で低気圧が次々と通過した。中旬から下旬にかけては、東アジア付近で偏西風の蛇行が顕著となったため、日本海を動きの遅い寒冷低気圧が相次いで通過した。このため、北日本や東・西日本の日本海側を中心に曇りや雨の日が多くなった。

5月上旬後半～5月中旬（東・西日本）：日本の南海上の高気圧が強まり、本州付近に前線が停滞

太平洋高気圧が日本の南東海上に張り出しその北縁に位置する前線帯を平年より北上させたため、日本の南岸から本州付近に前線が停滞することが多く、東日本、西日本を中心に曇りや雨の日が多かった。太平洋高気圧が日本の南東海上に張り出した要因としては、西部太平洋熱帯域で対流活動が活発であったことで高気圧が平年より北で強まったこと、上空の大気の流れが日本の南東海上で高気圧を強めるように蛇行したことがある。

5月下旬～6月中旬（北日本、東日本太平洋側）：日本の東海上の優勢な高気圧が停滞

東アジアから太平洋にかけては、偏西風の分流が顕著な状況がほぼ1か月間続き、アリューシャン付近からオホーツク海にかけて優勢な高気圧が停滞した。北日本や東日本太平洋側ではこの高気圧からの湿った東よりの風の影響でくもりの日が多かった。また、東海上で高気圧が停滞したため、低気圧の動きが遅く北日本日本海側では低気圧の影響を受けやすかった。一方、オホーツク海高気圧は一時的にしか現れなかったため、低温とはならなかった。また、この時期、南西諸島では梅雨前線の影響で日照時間がかなり少ない状況が続いた。

7月上旬～7月下旬前半（東日本、西日本と東北地方）：本州付近に活動が活発な梅雨前線が停滞

太平洋高気圧が日本の南海上で平年より強く、その勢力の北縁がちょうど本州付近になることが多かった。このため、太平洋高気圧の北縁に位置する梅雨前線も本州付近に停滞しやすかった。7月中旬中頃からは、偏西風の蛇行が強まったため日本付近に寒気が南下し、日本の南海上で優勢であった太平洋高気圧の間の梅雨前線を活発化させ、東日本から西日本にかけて大雨となった。日本の南海上で太平洋高気圧が強かったことに関しては、フィリピンの東海上で対流活動が平年より活発だったことも影響していたと考えられる。